

## 武吉次朗先生の「新語が映す中国」⑤

### 「社工・義工」 中国経済新聞 070915 掲載

社工は「社会工作者」の略で、social worker、つまり社会福祉活動に従事する専門職のこと。義工は volunteer のことで、中国では「志願者」と訳されているが、香港・台湾から入った義工が通称になっている。ちなみに義工は「義務社会工作者」の略で、中国語の「義務」には無償の意味がある。

いま中国には低所得階層が 7600 万人、身体障害者 8000 万人、孤児 57 万人、老人 1 億 4000 万人、出稼ぎ農民が 1 億 2000 万人いるとされ、これに児童などを加えると、社会サービスの必要な人口は膨大である。昨秋の共産党中央委員会で決議された「調和社会の構築」で、「都市と農村における社会ボランティアサービス活動の展開」「社会活動人材の大量育成と一連の制度的保障」が提起されて、社工と義工が一躍、脚光を浴びたわけである。

社工が所属する組織には、政府または半官半民の機構、前回述べた社区（コミュニティ）、それに「民弁非企業単位（NPO）」があるが、有能な働き手はまだ多くない。これに対応して、200 以上の大学に専門課程が開設され、毎年 1 万人が巣立っているのだが、しかるべきポストにつく者は 1 割に満たないといわれる。

理由は明白で、給与が安い上、社会の尊重度が低いとされ、特に政府から独立している NPO がおしなべて資金難に悩んでいるのも、社会の尊重度と関連している。身体障害者連合会の鄧朴方主席（鄧小平氏の長男）がこんな話をしたことがある。ある人が同会の事務局で働くことになった時、中国人の友人は「なぜ、よりによってそんな所で働くのか？」と軽蔑したが、米国の知人は「それは崇高な仕事です」と称賛した、というのだ。

香港も欧米と同様、政府のほかに競馬会などいろいろな基金が NPO を支援しており、社工の待遇は公務員並みである。

そこで、エンジニアに「エンジニア」の資格があるように、社工にも「社会工作者」の資格を設けて社会的地位を高めるとともに、それに見合った待遇を工夫することになり、資格試験が今年末にも実施されることになった。

義工の活動が活発なのは深圳で、6 万人が登録されており、出演料をすべて貧困者救済につぎ込み昨年 37 歳で死去した歌手の叢飛が代表例とされる。北京では教師、医師、兵士と大学生が 10 万人を超える義工の主力で、養成と管理のシステムも整備されつつある。西部の甘肅省では海外の NPO が教育や身障者支援を進めており、社会活動への理解を深める上でも役立っているという。

これまで開かれたオリンピックで、華やかな競技を黙々と支えるボランティアの存在は、選手と観衆に忘れがたい印象を残してきた。北京五輪では海外からの参加も含め 10 万人のボランティア募集が始まった。北京五輪は、中国でボランティア活動を飛躍させる契機になるかもしれない。